

北海道の技術、 ノウハウで 国際協力を

「積雪・寒冷」の地、北海道では百十余年にわたるその開発や発展の過程で上下水道や道路などのインフラ、農林水産業、石炭生産やその利用、あるいは地域開発などの分野において寒冷地の条件に適した貴重なノウハウを蓄積してきている。こうした技術やノウハウを開発途上国の国造りに役立てようと国際協力事業団（JICA）では、国、自治体、大学、研究所などの協力を得て、北海道でも多くの研修コースを開設している。また、北海道各地の自治体がこうした地元の技術を伝える研修に取り組んでいる。

今回は、地元や地域との連携で自治体が主体となって研修コースを開設し、JICAの研修員を受け入れている事業の中から、農業生産者の協力を得てアフリカのマラウイから研修員を受け入れている滝川市の例と、気候風土の似た中央アジア各国の研修員が寒冷地の社会基盤整備の技術を学んでいる北見市の例を紹介する。

農業生産のノウハウを アフリカのマラウイに生かして

◀ 滝川市の例 ▶

北海道の一大農業地帯のひとつ空知地方の中心に位置する滝川市では、平成12年度に初めてアフリカ・マラウイ共和国からのJICA農業研修員1名を受け入れ、畑作栽培技術や農協組織などについての研修を実施した。以降、平成13年度2名、14年度2名と受け入れが定着している。

滝川市の場合、平成5年度に米国マサチューセッツ州スプリングフィールド市との姉妹都市提携が行われる等、様々な形で国際交流の実績をあげてきたことが下地となり、地域の特性を生かした国際協力事業を展開しようとの機運が生まれた。

一方、JICAでは「地元密着」、「地域との連携」による研修事業の推進、研修コースの開設を進めてきた。このことから、双方の目的が合致し、「地域提案型」と呼ばれる滝川市での研修コースが実現した。



第1小学校での古切手等贈呈式

研修コースは、マラウイ共和国の国家基盤である農業を担う農業改良普及員の技術向上を目指したもので、北海道立花・野菜技術センター、北海道立植物遺伝資源センター、空知東部地区農業改良普及センター、ホクレン滝川種苗生産センター、JAたきかわ、江部乙農産物加工研究会手づくりの家「とまと」等の農業関連機関・団体、そして農業経営者の協力により、生産性向上技術、付加価値向上及び農産品流通システム、農業組織運営などを総合的に習得できるように策定されている。

研修開始当初は、受入先の多くが困惑し、農業経営者などからは「何を、どう教えたらよいのか」という疑問も呈された。しかし、技術的な研修のみならず、日本語・日本文化の習得にも熱心な研修員との交流やホームステイなどを通して、徐々に受け入れ態勢が整い、現在では様々なイベント・行事



チャリティーコンサートの益金贈呈式

等に市民と一体となって活動するまでになっている。

3年目を迎えた本年度は、各分野の専門家からなる6名の調査団を、1月9日～21日の13日間に渡ってマラウイに派遣した。現地では、これまでに受け入れた5名の研修員が活動している「ロビ地区」を訪問し、研修成果を検証する一方、洪水と干ばつの被害により苦しんでいる現地支援のために昨年6月に滝川市で行われた「チャリティーコンサートforマラウイ」の益金12万円を手渡してきた。また、マラウイ共和国農業灌漑大臣を始めとする農業関係者に会い、農業行政を調査すると共に今後の協力体制について検討してきた。

北海道指導農業士で、3年間の研修



マラウイのたばこ・マンゴー農家にて



「トマトの家」で煮込みを実習